

---

# 赤と青の神話 四章

深江 碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤と青の神話 四章

### 【Nコード】

N7503Z

### 【作者名】

深江 碧

### 【あらすじ】

北の国に向かうクロフは、デイリアの容態が良くならないのを不安に思う。そこで北の王の城に向かう。北の王は自分を称える歌を作る代わりに、デイリアの病を直してくれると言うが…。北の国編です。前の章の後半から、ちよっとページ数を増やして投稿しています。いい加減、さっさと終わりたい気が満々です。話が所々破綻していますが、目を通して、指摘していただけたら幸いです。

## 北の国へ

### 四章 北の国へ

クロフは走っていた馬の足を緩め、明るくなった草地の丘を見渡す。

辺りは白い朝の光に溢れ、川に立ち上る朝霧が金色に輝いている。クロフはまだ暗い西の空を見て、馬の首を軽く叩く。

「行こう」

クロフは気を失っているデイリーアを支えながら、慎重に馬を走らせた。

太陽が空に地上を照らす頃には、クロフは小さな村にたどり着いた。

クロフはその村で宿を借り、歩き疲れた馬を休ませる。

デイリーアの看病を村の薬師に任せ、クロフは宿の外に出た。

馬は宿の壁に取り付けてある鉄輪につながれ、村の少年に桶から水を飲ませてもらっていた。

少年はクロフに気が付くと、馬の首をなでながら歯を見せて笑う。

「これ、お兄さんの馬？ いい馬だね。おれもいつか自分の馬を持つのが夢なんだ」

「そう言ってもらえると、その馬も喜ぶよ」

クロフは少年に礼を言っ、入れ替わるように馬に話しかける。

「調子はどうだい？ 昨夜は夜通し走らせて、かなり無理をさせてしまったけれど」

馬はたてがみを振り、高いいなく。

「かまいません。一度はあの森で失いかけた命です。あなたのような主人になら、喜んでこの命、預けましょう」

栗毛の馬はうれしそうに鼻面をクロフの肩にすり寄せる。

後ろで馬の飼葉を運んでいた少年は、そのやり取りを見て目を丸くする。

急ぎ足でクロフの側に駆けてきて、興奮したように声を張り上げる。

「すげえ、すげえ。お兄さん、本当に馬と話してるみたいだっただぜ。もしかして、お兄さん実は偉い神官様？ それで馬と話が出来るとか？」

クロフは困ったように苦笑いを浮かべる。

「すげえなあ。おれもいつか馬と話せるようになりてえ！」

少年はなおも叫んでいたが、村の男に呼ばれどこかへ行ってしまう。

「動物の声が聞こえる神官も、この頃めつきり少なくなったと聞くから、きつと珍しいんだろう」

「人間にもいろんな人がいますからねえ」

馬が相槌を返す。

クロフは少年の運んできた飼葉を馬に与え、その隣に腰を下ろす。

宿でもらった布袋から大麦のパンを取り出し、半分は切った。

「ところで、君はどうして城壁の外にいたんだ？ もとはヒーネが君の主人だったんじゃないのか？」

クロフは大麦のパンを小さくちぎり、口に運びながら尋ねる。

「ええ、そうです。以前にお会いしたときは、あなたは沼地で畑を耕していましたね。わたしがあの貴族の馬として、再びあの森を訪れた時のことでした」

馬は飼い葉桶から顔を上げ、口を動かしながら答える。

「あの貴族には、反省すると言うことは無いのでしょうか？ あの貴族はあろうことが、部下の兵士共々、森へ馬で突っ込んだのです。馬で走り続けられ、泥に足を取られないでも思っただけでしょうか？ 馬鹿ですね」

馬は鼻息を荒くする。

「結果は、想像が付くでしょう？ 結局、わたし達は泥に足を取られ、彼らはわたし達を見捨てて、森の奥へと入っていきました」

「それでどうしたんだ？」

鼻息を荒くする馬を横目に、クロフが先を促す。

「そのまま泥に沈んだままだったのなら、君がここにいるのはおかしい。誰かに助けてもらったのだろうか？」

馬はいらだたしげに片足を上げ、地面の土を掘る。

「ええ。そのままでしたら、わたし達は命を落としていたでしょう。わたし達が泥の中に沈もうとしていた時、森の奥から鉄砲水が流れてきたんです」

クロフはパンをちぎっていた手を止め、馬を振り仰いだ。

「わたし達は水に押し流され、運良く泥から助かることが出来ました。その後、わたしは仲間達と共に草原で気ままに暮らし、今に至るのです」

話し終えると、馬は飼い葉桶に鼻を入れ、再び食べ始めた。

クロフは澄み渡った春の空を見上げ、赤い髪を風にそよがせた。

「ほんとうに、運が良かったんだね」

クロフは太陽の光に目を細め、口元に笑みを浮かべた。

## 北の国へ2

デイリーアの容態が急変したのはその夜だった。

村の薬師が調合した薬草も効かず、クロフは重態のデイリーアを馬に乗せ北へと向かった。

三日三晩馬で走り続け、三日目の朝には北の国の都にたどり着いた。

都は堅牢な白い城壁に囲まれ、その上には何人も兵士達が城門を見張っている。

城門の前には槍を構えた兵士達が見張りにつき、街全体が物々しい雰囲気包まれていた。

クロフは城門の前で街に入る人々の列に馬で並ぶ。クロフの番が来ると、門を守る守衛に話しかけた。

「この兵士の多さは一体何ですか？ 城で何かあったのですか？」  
守衛は不振そうな目付きでクロフを見上げていたが、肩に下げた豎琴に目がいくと、背筋を伸ばししかしこまった。

「はい、近いうちに南が攻めてくるという噂なので、その準備をしているのです」

守衛は折り目正しく答え、クロフの後ろにいる茶色の頭巾をかぶったデイリーアをのぞき込む。

「そちらの方は？」  
クロフはうなだれるデイリーアを慌てて背中にかばう。

「妹が病気なんです。この都の中で一番腕のいい薬師をご存じありませんか？」

守衛は持っていた槍にもたれかかり考え込んだ。  
近くで見回りをしていた別の兵士を呼び止める。

「それだったら、王宮に仕えるセクテばあさんが一番の腕前じゃない

いか？ 何てつたつて、王妃様のお抱え薬師だからな」

クロフは兵士に頭を下げ、城門を馬で通り抜けた。

通りに並ぶ露店を通り過ぎ、人混みを駆け抜け、王宮の大通りを進む。

そのうちに白い石壁に囲まれた、壮麗な王宮が見えてきた。

「しばらくお待ち下さい」

門の前の兵士はクロフが吟遊詩人と見ると、慌てて門の中に入っていく。

そのうちにきらびやかな衣装を着た女官に招かれ、王のいる部屋へと通された。

一段高い長椅子の上には、年老いた王とクロフとあまり年の変わらない若い王妃が座っている。

王は鷹のような鋭い目付きでクロフを見下ろしている。

「若い吟遊詩人よ。お前は何の望みがあつて王宮を訪れたのか」

低くしわがれた声がクロフの頭上から降ってくる。

「黄金か、地位か、名誉か？ それとも美しい女奴隷か？ わしのために詩を作り、子々孫々まで語り継いでくれると言ふのなら、お前の望むものを何でも与えよう」と

クロフは王の言葉を聞いて、低く頭を垂れる。

「では、彼女の、妹の病気を、王のお力でどうか治していただきたく存じます。それがわたしの願いです」

王は隣に座った王妃に顔を向ける。

王妃は細く白いあごでゆっくりとうなずいた。

「わかりました。その願い聞き届けましょう」

王妃は衣を揺らし優雅に立ち上がり、頭を垂れるクロフに歩み寄った。

「何も心配はいりません。妹の病気、きっと治して差し上げます。

安心なさい」

王妃はしゃがみ込み、白い手でクロフの赤い髪に触れる。

「ありがとうございます」

クロフは低く頭を下げる。

王妃は口元に笑みをたたえ、じっとクロフの赤い髪を見下ろして  
いた。

### 北の国へ3

デイリーアの寝かされている部屋に戻ったクロフは、寝台の枕元に老婆がかがみ込んでいるのに気が付いた。

老婆はクロフを振り返り、齒の抜けた口で笑う。

「若いの、まあそんな心配そうな顔をするな。ここにはいい薬草もあるで。何よりわしの腕がいいからな。きつとこの娘も助かるわい」  
老婆はデイリーアの額に枯れ木のような手のひらを当てる。

「この熱は背中に受けた傷のせいだな。背中の傷から悪いものが入り、そこが膿んでおるのだ」

老婆はデイリーアの体の向きを変え、傷に巻かれた布を解きながらつぶやく。

「若いの、いつまでそこに突っ立っておるつもりだ？ 手当を手伝うつもりが無いのなら、目障りじゃ。さっさと出て行きなされ」

クロフは老婆に追い出されるように、部屋を出て行った。

クロフは廊下の壁にもたれかかり、長いため息をついた。

デイリーアの容態が心配だったが、老婆に任せただけで、クロフの手伝えることは何もなかった。

それよりも王に申しつけられた詩を作るためにも、その題材を探さなければならなかった。

「あまり詩を作ることは、得意じゃないんだけど」

クロフはため息一つ、廊下を歩いていく。

廊下をしばらく行くと、空の見える大きな中庭に出た。

中庭の所々に木々の若葉が芽吹き、草地には白い花が咲いている。中央には大きな石が置かれ、その傍らからはこんこんと清水がわき出している。

その周りでは兵士見習いの少年達が、盾や槍を持ってぶつかり合

っていた。

クロフはぼんやりと庭の様子や、少年達の動きを眺めていた。金属のぶつかり合う音、少年達のかけ声が青い空に大きく響く。少年達の様子をもう少し近くで見ようと、クロフは中庭の中央へと歩いていった。

クロフに気が付いた少年達は、槍を持っていた手を休め、一斉に注目する。

クロフは慌てて言いまくろう。

「すみません。邪魔するつもりはなかったんです。ただ、訓練の様子をもう少し近くで見せてもらおうと思って」

少年達の中で、一番背の高い年上の少年が進み出る。

「かまいませんよ。戦場の騎士の武勇を詠う吟遊詩人のあなたの目にとまるなど、光栄なことです。良かったらもつと近くでどうですか？ あなたがかまわないのでしたら、一緒に訓練に参加してみませんか？」

盾や槍を手渡され、クロフは戸惑った。

しかし少年達の申し出を無下に断るわけにもいかず、クロフは渡された槍や盾を手に考え込んだ。

クロフは神殿で一通り剣や盾の扱い方は教わっていたが、実践したことは一度も無かった。

手渡された槍はクロフの背丈をゆうに超える長さがあったが、不思議と重さは感じなかった。

そこどころか、初めてとは思えないほどよく手になじんだ。

感触を確かめるために、クロフは槍を二度三度振ってみる。

それを見ていた少年の一人が、年上の少年に願い出た。

「槍の扱い方を知るには、実際に使ってみた方が早いんじゃないですか？ 何ならばくが教えて上げてもいいですけど。吟遊詩人さんはどうですか？」

「あ、ああ。よろしく」

好奇心な目で見つめられ、クロフは小さくうなずいた。

クロフは少年達の見ている中、広場の中央に進み出る。

対する少年がクロフの向かいに進み出て、槍を突き合わせた。

「太陽の女神ラナンよ。我らに正しき道を示したまえ。公平な戦いで勝利を約束したまえ」

突き合わせた槍を放し、お互い後ろに下がる。

少年はクロフの動きを伺うように、じっと盾を構えている。

「やっちまえ」

「負けるなよ、ルーン」

ちやかすような少年達の声が周りから投げかけられる。

クロフは少年の動きに目を配りながら、間合いを取る。

最初に動いたのは少年の方だった。

体を半歩横にずらし、クロフの胸元目がけて槍の一撃を放った。

クロフはかるうじてそれを弾き、受け流す。

続けて少年の槍が三度ひらめく。

クロフはそれらを盾で弾きながら、徐々に後ろに下がっていった。不意に少年が後ろに飛び退き、つまらなさそうに口をとがらせる。

「お兄さん、少しは真面目にやってよ。北の王国中を探したって、

そんな臆病な人はいないよ？」

少年達の間からどつと笑いが漏れる。

「それとも、ぼくと戦うのが怖いのか？ それだったら、最初から槍

なんて持たなければいいのに」

「それじゃあ……」

クロフは槍を握り直し、盾を下げる。

クロフの赤金色の瞳に赤い炎が燃え上がり、獰猛な獣のように狂気が宿った。

クロフは身を低くし、槍を構えた。

初めて戦いの意志を示したクロフに、少年は目を細める。

「やっと本気になってくれたみたいだね。そうじゃないと面白くないよ」

少年は盾を構える。

クロフは地面を踏みしめ、風にも勝る速さで強烈な一撃を繰り出した。

その槍の穂先からは白い炎が吹き出し、その手元が陽炎のように揺らいで見える。

クロフの槍の先は少年の盾の中央に突き刺さり、そこから煙を立ち上らせる。

槍先は盾の金属さえ溶かし、赤く燃えさかった炎をまとい、少年の胸元をかすめた。

少年はとっさに盾を捨てて、後ろに倒れ込んだ。

周りで見ていた少年達は瞬きさえ忘れて、その光景を眺めていた。クロフは槍の先を盾から引き抜き、炎をまとわせたまま横に振り払った。

少年達は一様に黙り込み、物音一つ立てずに黙り込んでいる。

「遠い神話の時代、火の神クルスはその燃えさかる炎の槍で、天上の神々に逆らった地下の神々を退けたと伝え聞きます」

不意にかげられた女の声に、クロフは振り返った。

中庭の泉の側にたたずむように、年若い王妃は婉然と微笑んでいた。

「あなたも吟遊詩人なら、この神話はわたしより詳しいでしょう？」

王妃はゆつたりとした衣を風になびかせ、クロフの前に進み出た。

「お強い吟遊詩人さん。わたしの部屋でその神話を語ってくださいらないかしら？」

## 北の国へ4

王妃の部屋は螺旋階段を上りきった、四階の隅にあった。

部屋に足を踏み入れた瞬間、クロフは鼻を押さえた。

薬草や花の蜜、あらゆる匂いが混じり合い、鼻が曲がりそうになったのだ。

部屋の中は薄暗く、炉には大きな釜がかけてあり、赤い炎が暗い部屋を照らしている。

部屋の片隅では、ディリアの治療をしてくれた老婆が、石を使って薬草を粉にしていた。

「いい香りでしょう？　ばあやに王が飲む特別な蜜酒を作ってもらっているところなの」

クロフは鼻を押さえたまま、部屋の入り口で立ち尽くしている。

「どうして、このような場所です？」

クロフが何気なく尋ねると、王妃の目がわずかに険しくなった。

「だって、王が飲んでいるのに、わたしが飲めないのは不公平でしょう？　だからばあやに頼んで、特別に作ってもらっているの」

王妃は少女のような無邪気な微笑みを浮かべる。

「でも、これは城の者には内緒よ」

口元に指を当て、王妃は片目を閉じた。

クロフはさらに奥の、炉の炎が燃える暗い部屋へと足を踏み入れた。

炉ばたの前にある椅子を王妃に勧められ、クロフはそこへ腰を下ろす。

炉の釜の中からは、同じような甘ったるい匂いと熱い湯気が立ち上ってくる。

クロフは肩に下げていた豎琴を下ろし、指でつま弾いた。

「王妃はどのような詩をご所望でしょうか？」

クロフは豎琴に目をやり、王妃の方を見ないで尋ねる。

「どうせならばさっきの話した、火の神クルススが地下の神々に戦いを挑む話がいいわ」

クロフは手を止め、ゆっくりと顔を上げる。

黙り込んだまま、赤金色の瞳で王妃を見据える。

王妃は声を立てて笑う。

「神殿に、知り合いがいるの。彼にちょっとね。南の神殿に珍しい子供がいると聞いたの。何でもその子は火の神の生まれ変わりだから。太陽の女神の神託では、何でも彼が世界を救うそうよ。すごいわね」

王妃はじろじろと物珍しそうにクロフを眺め回す。

「そう、ちょうどあなたのような赤い髪と瞳を持つ少年だそうよ」

「人違いです」

クロフは視線をそらす。

王妃は椅子から立ち上がり、クロフのそばの敷物に腰を下ろす。

クロフは出来るだけ王妃の目を見ないように、炉の中で燃える炎を見つめた。

王妃は白い手を口元に当てる。

「ねえ、あなたの妹、ひどい熱でうなされているんですって？」

クロフの肩がわずかに震える。

「でも、妹と言うわりには、髪も瞳も顔立ちも、全く似ていないように見えるけれど、これはどういふことかしらね？」

「何が言いたいんです？」

クロフは押し殺した声でつぶやく。

王妃は絨毯の上から立ち上がり、両手を広げる。

「あなたの力を借りたいのよ。そう、ほんの少しでいいの。ほんの少し、あなたがこの国のために力を貸してくれるだけでいいの」

王妃は婉然と微笑み、口元に手を当てる。

それは何者をも心とろかすような魅惑的な笑みだった。

「協力してくれるでしょう?」

クロフは視線をそらし、部屋の片隅の暗がりを見つめる。

「少し、考えさせてください」

そう答えるだけで精一杯だった。

## 北の国へ5

デイリーアの部屋に戻ったクロフは、寝台に近寄り、その枕元に立った。

デイリーアの顔は高熱のため赤く火照り、苦しそうに浅い呼吸を繰り返している。

炉の炎が赤い光を投げかけ、暗闇を照らし出す。

クロフは王妃の言葉を思い出していた。

あなたの力を借りたいの。

クロフは両手で顔を覆う。

それは神殿でクロフに向けて何度となくささやかれてきた言葉だった。

しかしクロフには火の神の生まれ変わりとしての自覚も、その力の扱い方も何一つわかっていなかった。

ただ何もわからず、周囲に言われるままに力を振るい、過ごしてきた毎日。

神殿にいた頃はそれで良かった。

人々にこわれるままに行動し、力を振るっていれば、問題はすべて解決した。

それがいつの頃からか、クロフの心にぬぐいようのない不安を抱くようになった。

一度抱え込んだ暗い気持ちは、クロフの心をむしばみ、その考えを鈍らせた。

クロフは人々の期待に応えるのが苦痛になった。

人々の声に耳を傾け、村々を巡り、英雄の武勇を語り継ぐのは、その神殿では下級神官の仕事だった。

火の神の生まれ変わりとして、将来を囑望されたクロフのする仕

事ではとてもなかった。

しかしクロフは周囲の反対をよそに、吟遊詩人として旅に出た。太陽の女神の神託に従い、旅先でデイリーアと出会い、彼女を助けたことを、クロフは正しいと考えていた。

しかしこの先のことを考えると、クロフの心は暗い気持ちに苛まれた。

ぼくはこれからどうすればいい？

クロフはデイリーアの顔を覗き込む。

額に手を当て、その布がぬるくなっているのに気付き取り替えた。床に置いてある水桶の水にさらし、額の上に戻す。

炉の中の薪がばちりとはげ、暗がりの部屋に小さな音を木霊させる。

クロフはゆらゆらと照らし出される足元の影を見下ろし、重いまぶたをとじた。

闇はすぐに落ちてきた。

目が覚めたのは翌朝のことだった。

朝の眩しい光に目を細め、クロフは突っ伏した寝台から顔を上げる。

「重い」

不機嫌な声に、クロフの頭は冷水を浴びせられたかのようにはつきりした。

「う、ごめん」

クロフは慌てて寝台から起きあがり、勢い余って椅子から後ろに転げ落ちた。

デイリーアは顔だけをこちらに向け、口元に笑みを作る。

「わたしの上に、大きな山猫でも乗っているかと思っただぞ」

デイリーアはゆっくりと上半身を起こし、軽く頭を振った。

クロフは尻餅を付いたまま口ごもった。

「いや、あれは、その」

「冗談だ。気にするな」

ディリーアは軽やかに笑う。

昨晚よりも幾分顔色が良くなったのを見て、クロフは安堵した。

ディリーアは見慣れない部屋を見回し、首を傾げた。

「ここは北の国か？　どうやら、また何らかの騒動に巻き込まれているようだな」

クロフはとっさに言葉に詰まった。

クロフの驚いた顔を見て、ディリーアは目を丸くする。

「何だ？　本当に凶星なのか？　冗談のつもりだったのだが」

部屋に気まずい沈黙が流れる。

炉にはわずかな火種がちらちらと燃えているだけだった。

先に口を開いたのはディリーアの方だった。

「まあ、仕方ないな。こういうこともあるだろう。よかつたら、事情を話してくれないか？」

クロフが城に到着してからの出来事を話すと、ディリーアの顔が途端に厳しくなった。

ディリーアはしきりに頭を振り、不機嫌そうにこめかみを押さえる。

「わたしの眠っている間に、あまり面白くないことが起きていたよ  
うだな」

ディリーアのつぶやきに、クロフは小さくうなずく。

「だから、しばらくは王妃へのはっきりした答えを先延ばしにして、  
王妃の真意を探ろうと思うんだ」

クロフは立ち上がり、炉に薪をくべ、炎を起こす。

「それで？」

クロフが振り返ると、不機嫌そうな青い瞳がこちらを見つめている。

「それで、お前は どうするつもりだ？　まさか王妃に直接理由を問  
い直すつもりじゃないだろうな？」

炎に薪をくべながら、クロフはつぶやく。

「まあ、最終的にはそうなるだろうと思っけど」  
ディリーアはかん高い声で叫ぶ。

「それは駄目だ！ 絶対に駄目だ！ 二度と王妃の部屋に近づくな！」

ものすごい剣幕でまくし立てるディリーアに、クロフは呆気にとられる。

「それは、またどうして？」

クロフの問いに、ディリーアは顔を赤くする。

「そ、それは、その。もし王妃に迫られでもしたら、ま、まずいだろう？」

ディリーアは恥ずかしそうにうつむく。

クロフはそんなディリーアを見て、目を丸くする。

「だ、だから、王妃は若くて美人なんだろう？ 部屋に行って、迫られでもしたら、お前は拒否できるのか？」

ディリーアは肩で息をしながら、青い目でクロフをにらみつける。  
これ以上話す事は何もないというように、さっさと寝台に潜り込んだ。

「まったく、兄妹げんかは良くないよ。あんまり興奮すると娘この熱がぶり返すよ？」

部屋の戸口には薬草籠を持った老婆が立っている。

老婆は寝台に近付き、枕元に籠を置いた。

寝台に手を伸ばし、娘の細い腕をつかみ、脈を測る。

「けんかできるくらいの元気があれば、大丈夫だね。しかし一晩で治しちまうなんて、わしの薬がよっぽど良かったんだねえ。これなら、後二、三日休んでいれば、すっかり良くなるよ」

老婆は満足そうに何度もうなずいた。

「そうそう、王が今夜の宴の席で、詩を披露して欲しいとおっしゃっていたよ。王もあれで気が長い方じゃないんでね、早く部屋の方に行った方がいいよ」

クロフは老婆に頭を下げ、豎琴を肩にかけ、慌てて廊下へ向かう。  
「あの、妹をどうかお願いします」  
クロフは老婆にディリアを頼み、部屋を出て行った。

## 北の国へ6

息を切らせ、王の私室にたどり着いたクロフは、扉の前の衛兵に王への取り次ぎを頼む。

扉は内側から開けられ、王の厳しい声が返ってくる。

「昨日の吟遊詩人か。入れ」

クロフが部屋へ入ると、王は炉ばたの長椅子の上でゆったりと横たわっていた。

王の傍らには、黒い二頭の番犬が王を守るようにクロフをにらみつけている。

「楽にするがいい」

王は鋭い目だけを動かして、クロフに炉ばたの近くの席をすすめる。

クロフは鹿皮の上に腰掛け、豎琴を手に取った。

「王は、今夜の宴でどのような詩をご所望でしょうか？」

長椅子の上の王は何も答えず、品定めするようにクロフを見回している。

炉の炎が揺らめき、重苦しい沈黙が部屋に流れる。

クロフは重い空気に飲まれないように、赤い炎越しに王の年老いた顔を見つめていた。

「ふむ、若い少しは骨があるようだな」

王はクロフから目をそらし、長椅子から起きあがった。

「昨日、王妃に部屋に呼ばれたそうだな？」

クロフは思わず顔を強張らせた。

「それで、部屋で何をしたのだ？ わしに話せないことか？」

王は深く刻まれたしわの間から、鷹のような鋭い眼光を光らせる。クロフは王にどう話して良いものか、考え込んだ。

迷った末、庭での一部始終を話すことにした。

中庭で少年兵達の訓練に混じり、そこで王妃に部屋に呼ばれたこと。

王妃の部屋では他愛ない話をしたこと。

クロフが火の神の生まれ変わりである話や、薬草酒を老婆が作っていたことなどは、あえて触れなかった。

王は話を聞いている間中、ずっと黙り込み、二頭の番犬の頭をなでていた。

「わたしは、王に疑われるようなことは、何一ついたしておりません」

王は眉間の深いしわを指で押さえ、難しい顔をしていた。

「それは、本当であろうな？」

「はい、太陽の女神様に誓って」

クロフは拳を胸の前に当て、頭を下げる。

王は眉間から指を放し、疑いの眼でにらみつけた。

「まあいい。今夜の宴で歌ってもらいたい詩だが」

王はクロフに若い頃の戦場での出来事を話し始めた。

今から二十年以上も昔のこと。

王には幾人かの頼れる部下がいて、そして愛すべきたった一人の妻がいた。

しかし度重なる南との戦争で、部下の多くは死に、ある者は捕虜として行方知れずになった。

多くの犠牲を払い、南との戦争に辛くも勝利した王だったが、王宮に帰り着いた彼を待っていたのは、愛しい妻の死の知らせだった。

「わしもこんな年だ。王子も王女もいないとあっては、わしの血筋もここで絶えてしまうだろう。だがせめて、わしの生きた証だけは後世に語り継いでもらいたい。そう思うのだ」

王は背を丸め、クロフに頭を下げた。

王座の間ではじめて見た姿より、今の王はずっと小さく年老いて見える。

「わかりました。今夜の宴までに、すばらしい詩を作ってご覧に入れましょう」

王は二頭の番犬の頭をなで、満足そうにつなずいた。

夜になり、王宮の広間では人々が蜜酒を酌み交わし、笑いさざめいている。

そんな中、クロフは広間の片隅で宴の様子をじっと眺めていた。宴もたけなわになり、クロフは広間の炉端にそっと進み出た。

クロフは中央のテーブルの前にいる王を盗み見たが、酒杯をかかげ、すっかり酔いが回っている様子だった。

クロフは炉ばたの椅子に座り、豎琴をつま弾く。

するとその音色に気付き、広間は急に静かになった。

彼はゆっくりと歌い出す。

「冬枯れの荒野を 風が吹き抜ける

冷たく霧をまとった風は

人々の骸の上を過ぎ

やがて海へとたどり着く」

クロフの静かな詩は酔いの回った人々の間をそよ風のように通り抜ける。

ある者は酌み交わした杯を下げ、ある者は声をひそめる。

テーブルの中央にいた王も、赤い顔でその物悲しい調べに耳を傾けた。

「野にある 霜降りたるニワトコは

戦場に散った者達を 抱き見守る役目を持つ

その木の枝を見て 旅人は何を想う

暗い冬の日に 人々は何を願う」

クロフは豎琴を弾きながら、王の方を盗み見る。

この一日、クロフが生前の王妃の話聞いて回ったところ、彼女はいつも王が他の女のところへ通うのを、胸を痛めていたと言う。

王妃が亡くなってから、王はぱったりと女遊びはしなくなった。それから十年以上の間、妻を持つことなく亡き妻を思い、独りで過ごしていた。

家臣達は年老いた王に子がいないのを心配し、若い女奴隷を与え、子を産ませようとした。

女奴隷は王の寵愛を受け、ついには王妃の地位まで授かることになった。

今の王妃のことだ。

王妃は元々は南の貴族の出身のせい、生来の性格のせい、年老いた王に次々とわがママを言うようになった。

年老いた王は、娘ほど年の離れた王妃をとても可愛がっていた。そのため、王妃に言われるままに、何でも望みを叶えてやった。

王妃のわがママは留まるところを知らず、ついには政治にまで口を出すようになった。

長年王を支えてきた家臣達が渋い顔をするのかまわず、王と対等に意見を交わすようになった。

「身罷りしは 白銀の髪の王妃のカーティナ

その目差しは 春の木漏れ日のように

見る者の心に 暖かな安らぎを与え

緑燃える木立に とまる小鳥のように

王の側に 静かに寄り添う」

クロフは今日一日話を聞いて回ったが、王の胸中がどのようなものか、亡き王妃への想いが今も残っているのか、計りかねた。

「黒い槍の王モドゥンは

灰色の二頭の馬に引かれ

黄金の戦車で 嵐の荒野を駆ける

押し寄せる人の波

ぶつかる槍の穂先

戦場は血の海となり

丘の下には赤い川が流れる」

クロフは詠いながら、ふとディリアのことを思い出した。

ディリアも王妃と同じように、戦争の捕虜として異国へ連れてこられた身だった。

王妃は戦争の戦利品として、南の国からこの北の都へやってきた。そのまま南の国に留まっていれば、どんなにか輝かしい未来が待っていたに違いない。

王妃は女奴隷として使われる日々は何を思ったのだろう。

父と子ほども年の離れた王に嫁がされて、何を考えたのだろう。

年若い王妃の姿が、床に伏せるディリアの姿と重なって、クロフの胸は鈍く痛んだ。

クロフは豎琴の物悲しい調べに合わせて、戦いで王の勝利、都への帰還、北の人々の喜びを歌い上げ、最後に王妃の死を知った王の憤りでその詩を締めくくった。

「月の神シンドウ

夜空に優しげな光をたたえながら

何故美しい王妃を

暗い地下へと連れ去った

その清らかな青い鎌で

小さな草花を刈り取るように

その鎌を持って

白銀の王妃の命を刈り取るのか

彼女の横顔を

明るい朝の光が照らし

白い頬は薔薇色に染まる

王は嘆き悲しみ

在りし頃を思い返しても

王妃の命が返ってくることはない

長い冬が過ぎ去り

暖かな春の日差しが花々を照らすことも

王の心の氷を溶かすことは出来ない

森の木々が芽吹き

湖の魚が泳ぐ頃になっても

ただあの人の姿だけが見えない

森の奥深く

谷川に分け入り

風吹きすさぶ古城を巡り

荒野を馬でどんなに探そうとも

あの人はどこにもいない

どこにもいない」

クロフは最後の旋律を歌い終え、  
豎琴の弦から静かに指を放した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7503z/>

---

赤と青の神話 四章

2011年12月29日08時45分発行